

資料 『源氏物語 横笛』

(奥書家文書2999「源氏物語」よし笛)(源氏四十九才二月迄ノ事アリ)(写本)「近世」

3 丁裏

ふくもえとりやらでやがてそのみなみのひさしにいれ奉給へりはしつかた成つる人の

秋の夕の物あはれなるに

をちば也
一条の宮をおもひやり

きこえ給ひてわたり給へり、うちとけしめやかに 御琴どもなどひき給程成べし

ふかくもえとりやらでやがてそのみなみのひさしにいれ奉給へりはしつかた成つる人の

ふかくもえとりやらでやがてそのみなみのひさしにいれ奉給へりはしつかた成つる人の

ふかくもえとりやらでやがてそのみなみのひさしにいれ奉給へりはしつかた成つる人の

ふかくもえとりやらでやがてそのみなみのひさしにいれ奉給へりはしつかた成つる人の

ふかくもえとりやらでやがてそのみなみのひさしにいれ奉給へりはしつかた成つる人の

程なり、例のみやす所対面し給ひて、 昔の物語ども聞えかはし給、 わが御とのゝ

明くれ人しげく物さはがしく、 おさなき君達など

明くれ人しげく物さはがしく、 おさなき君達など

いと静にもあはれ也、 うちあれたる心ちすれど、 あてにけたかくすみなしたまひて、

前栽の花ども、 へ虫のねしげきのべとみたれたる 夕ばへを、 みわたし給、 和琴を

ひきよせ給へれば、りちにしらべられて、いとよくひきならしたる、ひとがにしゆみて、

なつかしうおぼゆ、かやうなるあたりに、おもひのまゝ成すき心ある人は、しづむること

なくて、さまあしきけはひをもあらはし、さるまじき名をもたつるぞかしなど、おもひ

つゞけつゝかきならし給ふ、故君の常に

ひき給ひしこと也けり、おかしき手ひとつ

などすこし引給ひて、タ 詞哀いとめづらか成ねに、

かきならし給ひしはや、この御こと

4丁表

ひきよせ給へれば、りちにしらべられて、いとよくひきならしたる、ひとがにしゆみて、

なつかしうおぼゆ、かやうなるあたりに、おもひのまゝ成すき心ある人は、しづむること

なくて、さまあしきけはひをもあらはし、さるまじき名をもたつるぞかしなど、おもひ

つゞけつゝかきならし給ふ、故君の常に

ひき給ひしこと也けり、おかしき手ひとつ

などすこし引給ひて、タ 詞哀いとめづらか成ねに、

かきならし給ひしはや、この御こと

ひきよせ給へれば、りちにしらべられて、いとよくひきならしたる、ひとがにしゆみて、

なつかしうおぼゆ、かやうなるあたりに、おもひのまゝ成すき心ある人は、しづむること

いとことほりの御思ひなりや、ゝ限だにあると打なかれて、
ことはをしやり給へれば、

かれ猶さらばこゑに つたはることもやと、聞わくばかりならさせ給へ、ものむつかしう

思ふ給へしづめるみゝをだに、あきらめ侍らんと聞え給を、

しかつたはるなかのをは

(夕詞)

ことにこそ侍らめ、それをこそ承らんと聞えつれとて、
みすのもと近くをしよせ

給へど、とみにしもうけひき給ふまじきことなれば、

しるても聞え給はず、月さし

出て曇なき空に、
はねうちかはす 雁がねも、つらをはなれぬ、うらやましくきゝ給

らむかし、風のはたさむく、物あはれなるに、さそはれて、さうのことをいとほのかにかき

ならし給へるも、おくふかきこゑなるに、いとこゝ心とまりはてゝ、中くにもおほゆれば、

民衆と云へば、つゝねに、おまゝ恋といふまいといふや

琵琶を取よせて、

いとなつかしきねに、想夫恋を

ひき給ふ、おもひをよびがほ

うゝいふと字は是といふやうにあら

なるはかたはらいたけれど、

是はことゝはせ給ふべくやとて、せちにすのうちを

そのしをうへてつぎふりへておいたとて

そこのかし聞え給へど、

ましてつゝましきさいらへなれば、宮はたゞものゝみあは

まゝおぼつそふに
いにおくたふし

れとおぼしつけたるに

タ
へ
ことに 出て いはぬをいふに まさるとは 人にはぢたる けしきをばみる

やうしてよにもとつゝいふといふ
やうにわかれぬといふといふ

ときこえ給ふに、たゞすゑつかたをいさゝかひき給

ふかき夜の あはればかりは きゝわけど ことより外に えやはいひける

※日本文学(中古)の通例に合わせ、カタカナは変体仮名として扱い、ひらがなで表記しています。